北海道苫前商業高等学校
報道記事

令和７年４月～

朝日新聞
北海道新聞
日刊留萌新聞
北海道通信社
日本農業新聞

北海道新聞　６月６日掲載

苫前商高生 北大祭に初出店

コーヒー、地元産スイーツ あす販売

【苫前】苫前商業高生が7日、札幌市北区の北大キャンパスで開かれる北大祭に模擬店「TOMA CAFE」を初めて出店する。入れたてのコーヒーと、地元のカボチャなどを使ったスイーツを販売する。生徒たちは「札幌で苫前をPRし、知名度を上げたい」と張り切っている。

北大祭で苫前のPRに意欲を見せる苫前商業高生

北大祭は6～8日に開かれ、学生や近隣住民ら例年10万人が訪れる一大イベント。期間中、「まるっと北海道フェスタ」と題して、道内各地の高校や観光協会など6団体が地域の特産品を販売する。今年は苫前町が初めて出店。町特産のタコの頭部分を使った「お頭（かしら）たこ飯」と甘酒「あまぴりか」を扱う。

苫前商業高生の「TOMA CAFE」は7日午前9時～午後5時に出店。2、3年生の6人が入れたてのコーヒー、苫前産カボチャを使った「カボレーヌ」「かぼタルト」などスイーツ（250～300円）5種類を計約1300個販売する。

目標は完売「マチのいいところPR」

6人は放課後に打ち合わせやレジ打ちの練習を重ねている。店長を務める長谷川靖幸さん(16)は「目標は完売。やってみせます」と自信を見せる。山本ひな子さん(17)は「元気よく明るく接客して盛り上げたい」と笑顔で話している。

カフェは地域の魅力発信の役割も担う。村上芽華さん(17)は「苫前のいいところをいっぱいPRして、世界中に苫前を知ってもらいたい」と意欲的だ。（森麻子）

日刊留萌　７月２０日掲載

今年はあんどん2基が行進

苫前商高「苫商祭」ＹＯＳＡＫＯＩを披露

【苫前】苫前商業高校（板野成人校長、生徒52人）学校祭のあんどん行列、ＹＯＳＡＫＯＩソーラン演舞披露が13日、町公民館などで行われ、生徒たちと地域住民が共に夏のひとときを楽しんだ。

あんどんを背にＹＯＳＡＫＯＩソーラン演舞を披露する生徒たち

あんどん行列は、同校の学校祭「苫商祭」に合わせて行われる伝統行事。生徒数の減少などにより一時途絶えていたが、令和3年の学校祭で21年ぶりに復活。

以降、地元建設協会があんどん製作用に作業場所を提供するなど、地域の支援を受けながら続けられている。4年からは、あんどん行列に加え新たな伝統の一つにーとの思いから生徒が練習を重ねたＹＯＳＡＫＯＩソーラン演舞の披露も行われている。

今年は、前夜祭の12日午後7時過ぎに生徒製作のあんどん2基が同校を出発。生徒や教職員に加え、保護者ら地域住民が連なり古丹別市街地を巡行。沿道には多くの地域住民が集まり、温かな声援を送った。

途中、立ち寄った町公民館駐車場では、あんどん2基を背に生徒たちが整列。生徒を代表して2年生の高橋呂玖野君（16）が「キャンプファイヤーをバックに披露した昨年を超えます」と力強く宣言したあと、ＹＯＳＡＫＯＩソーラン演舞を披露。2枚の旗が大きく振られる中、躍動感いっぱいに踊り練習の成果を発揮。見守る地域住民から大きな拍手が送られた。

踊り終えたあと、沿道に駆け付けたり、演舞の場所を提供してくれた各関係者への感謝を伝える生徒たちに、再び大きな拍手が送られていた。

（雪田康一郎）

北海道通信　８月８日掲載

苫前商高 町内イベントでカフェ

全校生徒で盛り上げる

トマトカレーなど販売

【留萌発】苫前商業高校（板野成人校長）は7月27日、苫前町内で開催された第22回風車まつりで軽食などを提供する「TOMACAFE」を出店した。地元農家の協力を受けて開発した苫商トマトカレーやカボチャを使用したスイーツ、冷たい飲み物を販売。町の一大イベントの盛り上げに大きく貢献した。

同校では、町のイベント等で、授業で開発した商品を販売・提供する「TOMACAFE」を出店している。

今回は初めて全校生徒が参加。4グループがシフト制で接客や調理を担当した。

会場では、町内の農家の協力を受けて開発した苫商トマトカレー、町特産のカボチャを使用した「かぼたると」「かぼレーヌ」などのスイーツなどが出店スペースに並んだ。

生徒は4グループに分かれて、調理や接客にシフト制で対応。「冷たい飲み物も販売しています！」など、元気良く商品を売り込んだ＝写真＝。

グループのリーダーを務めた東海林桃果さん（2年）は「全校生徒での参加は初めて。1年生の人数が多いので、アドバイスをしながら接客していきたい」などと話した。

日刊留萌・北海道新聞　９月９日掲載

短期留学した高橋君と輪島さんが成果を報告

苫前商業高校国際交流事業　福士町長を表敬訪問

【苫前】苫前商業高校（板野成人校長）の国際交流事業で、夏休みを利用してニュージーランドに短期留学した2年生の高橋呂玖野君（16）と、1年生の輪島維俐さん（15）の2人が5日、福士敦朗町長を表敬訪問し、海外で見聞を広めた成果を報告した。

国際交流事業は、英語を使用する国に生徒を派遣し、英語とその文化に直接触れることで広い視野と国際感覚を持つ人材を育成することが狙い。令和6年度はオーストラリアに生徒を派遣している。

今年の派遣期間は、8月6～19日の14日間。2人はホストファミリーの下にホームステイし、博物館見学やキャンパスツアー、大学生との交流を行うなどして異文化に触れ、見聞を広めてきた。

ホームステイ先で料理を振る舞い、喜んでもらえた思い出を話すのは高橋君。「今までの経験の中で一番の経験だった。留学を通して自分の見ていた世界はまだ狭かったのだと思った」と感想を語った。

一方、輪島さんは「現地の人、文化などに触れ心の底から楽しめた」とニッコリ。「短期留学を通して自分が成長していることが自分でも感じることができた」と振り返る。

「今回の留学経験を今後の学校生活に生かしてほしい」とエールを送る福士町長に、2人は土産のニュージーランド産はちみつなどをプレゼント。短期留学に対する支援への感謝を伝えた。（雪田康一郎）

福士町長（左）に短期留学の成果を報告した高橋君（中央）と輪島さん（町提供）

北海道新聞 2025.9.9

NZに短期留学「成長」

苫前商高生2人が帰国

【苫前】8月に町の国際交流事業としてニュージーランドに短期留学した苫前商業高2年の高橋呂玖野（ろくや）さん（16）と同1年の輪島維俐（いおり）さん（15）が、福士敦朗町長に帰国あいさつをした。

短期留学は8月6～19日の2週間。2人は同国のオークランドでそれぞれホームステイしながら語学学校に通い、現地の文化を学んだり交流を深めたりした。

2人は9月5日に町役場を訪れた。留学生活について高橋さんは「北海道に似た気候で、人の温かさが心に残る貴重な経験をした」。輪島さんは「多くの経験を通し、自分の成長を実感できたことが収穫」と振り返った。

福士町長は「今後の生活にこの経験を生かしてください」と激励した。（森麻子）

福士町長（左）にお土産を手渡した高橋さん（中央）と輪島さん

北海道通信　９月１０日掲載

北　海　道　通　信

苫前商高　札幌で生徒販売実習会

13日に「苫前市場」開店

カボチャ使用のスイーツ等

【留萌発】苫前商業高校（板野成人校長）は13日午前10時から、札幌市内の大通ビッセ地下2階フロアで生徒販売実習会「苫前市場」を開催する。当日は、生徒が考案した苫前町産のカボチャを使用したオリジナルスイーツや町の特産品などを販売する。3年生の三好光さんは「最後の販売実習を悔いなく、笑顔で売り切れるよう頑張りたい」と力強く宣言した。終了時間は午後3時45分を予定している。

完売を目指す三好さん（左）と佐藤さん

実習会は、生徒が関係者らと交渉・調整を担い、特産品や野菜などを仕入れて販売することで、苫前の地域振興やPRを目的としたもの。今回で5回目を迎える。

当日は2・3年生、計15人が参加する予定。学年ごとのグループに分かれて、町内の農家が育てた野菜や生徒が苫前町産のカボチャを使用して開発したスイーツ、シカの角を加工した箸置きなどを販売する。

2年生の佐藤亜美さんは「完売が目標。元気良く高校生らしく売り、来年以降にもつなげていきたい」と話した。

また、同日は苫前会場として同校にカフェスペースを開設。1年生が飲み物などを提供する。時間は午前10時から午後2時まで。

北海道通信　９月１６日掲載

苫前商高の高橋さん、輪島さん

日本の良さを再確認

ＮＺ留学で町長表敬訪問

福士町長に土産を手渡す高橋さん（中央）と輪島さん（右）

【留萌発】苫前町の国際交流事業としてニュージーランドでの語学留学に参加した苫前商業高校（板野成人校長）の高橋呂玖野さん（2年）、輪島維俐さん（1年）が5日、苫前町役場を表敬訪問した。福士敦朗町長と開発法起教育長に現地での学びを報告。高橋さんは「他の国と日本の違いを知ることができ、あらためて日本や自分の住む場所の良さを知ることができた」と笑顔で話した。

交流事業は、高校生が諸外国の文化・歴史に触れ、広い視野と国際感覚を有する人材を育成することを目的としたもの。本年度は8月6～19日の期間で、高橋さんと輪島さんの2人が語学や現地の文化について学んだ。

5日には、福士町長と開発教育長のもとを訪問して実施報告。2人は現地での学校生活やホストファミリーと過ごした休日の思い出を紹介した。輪島さんは「自分の成長を感じることができた。短い期間でも自分がこんなに変わることができたことを実感している」と話した。

福士町長は「外国と自分の住んでいる地域の良さを知る貴重な機会だったと思う。今後に生かしてほしい」などとエールを送った。

報告終了後、2人が現地で購入した菓子などを手渡し、謝意を伝えた。

北海道新聞　１０月２５日掲載

苫前商高生 地元トマトカレー

きょう公民館フェスで販売「将来はレトルトに」

オリジナルカレーを販売する苫前商業高の生徒たち。中央が高橋さん

【苫前】苫前商業高の生徒有志6人が、地元の古丹別産ミニトマトをたっぷり使ったカレーを開発した。25日に始まる町の公民館フェスティバルで、同日正午から1食600円で50食販売する。生徒は「将来はレトルトカレーとして売りたい」と意気込んでいる。

同校は町内外のイベントで、生徒がコーヒーやスイーツを販売する「苫カフェ」を出店しているが、食事メニューがなかったことからカレーを提供しようと考えた。「店長」を務める2年の高橋呂玖野（ろくや）さん(16)はもとも と料理好き。子どものころからハンバーグやカレーを作って家族にふるまい「喜んでもらえるのが楽しかった」といい、レシピ作りに挑戦した。

カレーには古丹別産ミニトマトを加え、スパイスを配合したり、ナッツを使ったりと試行錯誤を重ねてレシピを考案。町内の飲食店のアドバイスも受けニンジン、タマネギ、ナスなどをたっぷり使ったオリジナルカレーが完成した。

商業高生らしく原価計算も行い、材料を厳選した。試食した同級生からは「辛すぎず、スパイスが効いている」「野菜嫌いでも食べやすい」と好評だったという。

メンバーの佐藤亜美さん（2年）は「めっちゃおいしくできた」とPRする。高橋さんは「応援してくださった苫前のまちの皆さんの思いがこもったカレーになった」と完売に期待する。（森麻子）

日刊留萌　１１月２１日掲載

苫前町で開かれた町民フットサルフェスティバル２０２５

9チームが白熱の攻防

苫前でフットサルフェス

【苫前】町スポーツセンター主催の町民フットサルフェスティバル2025が、15日午後6時から同センターで開かれ、出場した9チームの選手たちが、白熱の攻防を展開した。

フットサルを通じたスポーツ活動への参加意欲向上や、スポーツの日常化へのきっかけづくりを目的とした恒例のイベント。

今年も中学生以上を対象に、1チーム5人編成で10人まで登録可能とし、町在住者や町内勤務者がチームの3分の2を占めていれば町外者（10人登録で最大3人まで）も参加可能として開催した。

苫前中学校、苫前商業高校や羽幌高校の生徒や教職員、母国のカメルーン、インドネシア、アメリカから遠く離れた町内で働く若者などで構成した9チームがエントリー。

3チームずつ本戦のA、B予選ブロックを経ての順位決定戦、1位のみを表彰する交流リーグに分かれて優勝を争った。

選手たちは和気あいあいのムードの中にも闘志満々。巧みなパスワークで相手チームのディフェンスをかわし、シュートチャンスをつくるなど、スピーディーな攻防を繰り広げた。

目の離せない試合展開に見守る他チームの選手も歓声とため息を交錯。外の寒気をよそに、会場は熱気に包まれていた。

（雪田康一郎）

結果は次の通り。

▽本戦リーグ　①ミドルシャイ　ンマスカット（平井徹、森本心、太田俊哉、古川光、石川力也、渡邊颯、花田郁哉、大橋瑛太、ワミゴンガン）②STARMAN③真向勝負!!

▽交流リーグ　①寺の子（森口新太、相間野時音、鈴木聖岳、山本昊承、渡邊唯斗）。

北海道新聞　１１月２９日掲載

苫前中高生 初の合同発表

地域ＰＲの取り組み報告 苫前中

「豊饒太鼓」の演奏に挑戦 苫前商高１年

農家の「困り感」解決策は 苫前商高２、３年

【苫前】苫前商業高生と苫前中生が本年度取り組んできた学習の成果を報告する「とままえ発表会」が29日午後1時半から町公民館で開かれる。合同での開催は初めて。苫前商業高の1年生は郷土芸能「豊饒太鼓」の「羆嵐」の練習を重ねている。

町内できょう開催

苫前中は「とままえ科」、苫前商業高では「とままえ学」としてそれぞれ地元苫前町の歴史や産業、まちおこしを学び、探究を深めている。今年は町教委の仲介もあって「お互いの学びを知って、相乗効果につながれば」と合同発表会が実現した。

苫前中は地元の特産品を調べ、町内のコンビニに特産品のマスコットを置いたり、フォトコンテストを開催したりするなど、地域PR活動について報告する。

苫前商業高は1年生が全員で「豊饒太鼓」に挑む。「羆嵐」は1915年（大正4年）に町内で起きた三毛別ヒグマ事件をモチーフにした約20分の演奏。クマに襲われて逃げ惑う村人やヒグマに立ち向かって倒すまでの様子を勇壮な和太鼓で表現する。

2、3年生は地元の農業者に聞き取った「困り感」解決策や、生徒が町内や札幌のイベントで展開する「とまカフェ」の活動や課題を発表する。発表の後は参加者との対話時間を設ける。

同校の佐賀優真教諭は「中高それぞれ苫前について学んだ内容を共有し、より深い探究につなげ、中学生には進路選択の参考になれば」と期待する。

発表会は参加無料。問い合わせは町公民館、電話0164・65・4076へ。（森麻子）

「羆嵐」の練習に励む苫前商業高生

日刊留萌　１１月３０日掲載

2年生が地元漁師から鮭トバ作りのコツ学ぶ

苫前商高

【苫前】苫前商業高校（板野成人校長）の「鮭冬葉作り」が25日、町公民館生活技術研修室で開かれ、生徒たちがサケのさばき方やおいしいトバ作りのコツを学んだ。

鮭トバ作りは、マチの漁業や農業を学ぶとともに実際に生産者の下へ出向き、見学などをしながら商品がどのようなルートを巡って消費者の手に渡るのかを調査することを目的に、各種活動を行っている「地域学オロロンデザインⅠ」の一環。今回は2年生13人を対象に実施した。

講師は町内在住の漁師磯崎功さん。例年この時期に苫前公民館講座やシニアスクール事業の一環として行われる「鮭トバ作り」でも講師を務めており、秋サケを使い磯崎さんがブレンドした特製の調味料で味付けする鮭トバは、参加者の好評を集めている。

昨年は、価格が高騰していることから秋サケの代わりにホッケを使用。「ホッケのトバもおいしく好評だったが、今年はホッケが高くなってしまった」と磯崎さん。

この日は体長50㌢以上の秋サケ20匹を用意。磯崎さんがさばき方を実演したあと、生徒たちが挑戦。包丁を使って1人1匹ずつ、三枚におろしてから、身をカッターナイフで短冊状にカットした。初めて魚をおろす生徒もおり、作業開始直後は手間取る姿も見られたが、徐々にコツをつかみ2匹目をさばき始める生徒も。さばき終えた秋サケは特製調味料をまぶした。

作業終了後、磯崎さんは「冬休み前に皆さんへ渡せるよう、暖房をつけてでも頑張って乾かす」と呼び掛け、生徒たちは鮭トバ完成への期待に胸を膨らませていた。（雪田康一郎）

磯崎さん（左）からサケのさばき方を教わる苫前商業高校の生徒

包丁を使い鮭トバにする秋サケをさばく苫前商業高校の生徒

日刊留萌　１２月２日掲載

羽幌高チームが優勝

建設業クイズ　留萌市で地区予選開催

高校生建設業クイズ選手権北海道大会「コンストラクション甲子園」留萌地区予選が、11月29日午後1時から留萌市中央公民館講堂で開かれ、留萌管内高校生が熱い戦いを繰り広げた。

学生に建設業界への関心を深めてもらうことなどを目的としたクイズ大会。同日、道内各地で地区予選が開かれ、北海道大学の高野伸栄教授が問題監修を行った。

萌志会（留萌建設協会二世会、藤野徹弥会長）主催の留萌地区予選には留萌、羽幌、苫前商業の3校から、1チーム2人で構成した11チームが出場。開催に当たり藤野会長が「果敢にチャレンジして、良い結果を出していただけたらと思います」とあいさつした。

この後、全チームで筆記テスト30問に取り組んだほか、4チーム2ブロック、3チーム1ブロックに分かれて、2択クイズ7問、4択クイズ8問に挑戦。各ブロックで筆記テストと2、4択クイズの総合得点が高かった上位2チームが、決勝に進んだ。

決勝は12問のパネルクイズを実施。高校生は各チーム2枚ずつ配布された、得点2倍カードの使い所も考えながら、民族共生象徴空間「ウポポイ」などに関する問題に答えた。

結果、いずれも羽幌2年の大田蒼輔君（17）、天谷心さん（17）のチーム「大化の改新」が360ポイントで優勝。300ポイントで同率2位の「蒲焼」（苫前商業）、「ケーキバイキング」（留萌）に60ポイント差をつけた。

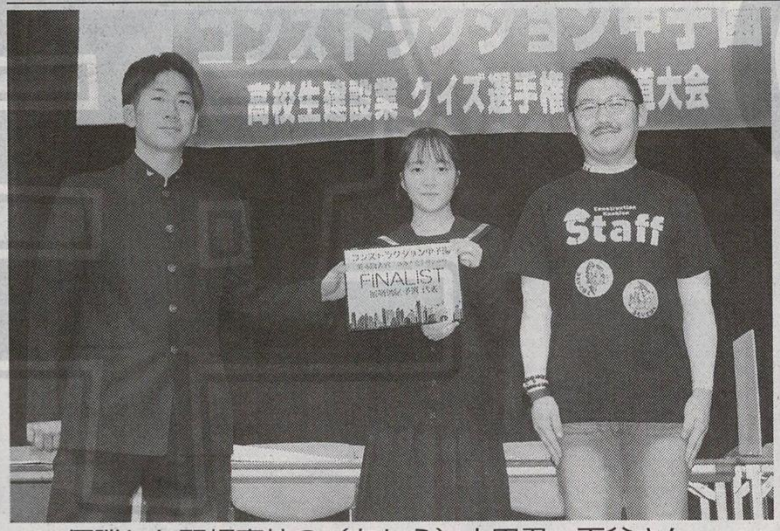
昨年も出場したが、タイブレークの末、苫前商業のチームに敗れてしまった大田君、天谷さん。リベンジを果たすことができ「最高です」と喜んだ。

2人は、留萌地区予選の結果を受けて、来年1月24日に札幌市のサッポロファクトリーアトリウムで開かれる決勝大会出場が決定した。ほかの地区予選会から勝ち上がったチームと沖縄旅行を懸けて戦う。

大田君は「勉強して良い成績を残せたらなと思います」、天谷さんは「強豪校に負けず頑張りたいです」と気合十分に話していた。

留萌地区予選の様子は市内のコミュニティーFM放送局「エフエムもえる」で、12月9、10の両日、いずれも午後4時半から放送する予定となっている。

また、留萌地区予選会場では、北海道開発局の第9期北海道総合開発計画を周知するパネルの展示、るも



優勝した羽幌高校の（左から）大田君、天谷さん。右は萌志会の藤野会長

留萌地区予選で行われたパネルクイズ

北海道新聞　１２月５日　掲載

苫前元気に 中高生発表

合同で初 両校でディスカッションも

ステージで学習の成果を披露する苫前商業高の生徒

【苫前】苫前中と苫前商業高の生徒が、地域学習の成果を報告する「とままえ発表会」が、町公民館で開かれた。生徒たちの実践報告に、保護者や町民らが大きな拍手を送った。

両校はそれぞれ、総合的な学習の時間などを利用して地元苫前町の歴史や文化を学んでおり、11月29日に初めて合同発表会を開催した。

同高の2、3年生は、校内選考を経た2グループが発表。町内や札幌などで地元産品の販売実習「苫前市場」を行ったグループは、コスト削減や仕入れ方法の見直しで昨年度までの赤字を解消し、本年度4万円以上の黒字を達成したと報告した。

苫前の活性化をテーマに両校生徒によるディスカッションも行われ、グループごとにフォトコンテストなどのアイデアを報告。集まった町民が「実現の可能性は」などと意見を寄せ、議論を深めた。

冬の運動会を提案したグループの苫前中2年堀切晄陽さん(15)は「校外の人の話を聞いて、新しい視点を知ることができて自信がつきました」と話した。

発表会ではこのほか、同高の1年生が郷土芸能「豊饒太鼓（ほうじょう）」の「羆嵐（くまかぜ）」を披露。町内で1915年（大正4年）に7人が犠牲になった三毛別ヒグマ事件をモチーフにした和太鼓の演奏で、力強いばちさばきを見せた。

（森麻子）

発表もとに来場者と意見交換

とままえ発表会　中高生が学習成果披露

【苫前】苫前中学校（佐藤美智子校長）、苫前商業高校（板野成人校長）合同の「とままえ発表会」が、11月29日午後1時半から町公民館講堂で開かれた。各校の生徒が「苫前」について学んだ成果を発表し、発表内容をもとに来場者と熱く語り合った。

「とままえ発表会」は、昨年まで各校それぞれ開催していた苫前中の「総合的な学習の時間発表会」、苫前商高の「体験発表会」を合同で開き、各校が取り組んできた学習成果を来場者を含め共有した上で、意見を交換する場として初めて開催。

両校生徒や地域住民ら約100人が参加し、会場には福士敦朗町長や獣害史上最大の惨劇「三毛別羆事件」を題材にしたフィクション小説「羆嵐」の著者である故吉村昭さんの長男・司さんの姿も見られた。

板野校長は「とままえ発表会は、昨年から企画し1年越しでの開催となった。福士町長や吉村さんにも臨席いただき感謝したい」と語り、「生徒たちには互いに学び合い、探求につなげ見聞を広げるチャンスとしてほしい」と呼び掛けた。

苫前商業高校生徒は、マチの郷土芸能「豊饒太鼓」披露と校内選抜発表、「苫商トマトカレー」などの課題研究成果を、苫前中生徒は地域学「とままえ科」として1年生が「苫人になる～自指せとままえ観光大使～」、2年生は「苫人として生きる～とままえでどう生きるかを考える～」、3年生は「苫人のマチおこし～自分たちにできるマチおこし～」をテーマに励んできた学習成果を、4グループに分かれてそれぞれ発表。

来場者が各グループを順に巡り、生徒たちの発表内容をもとにディスカッションを行った。

豊饒太鼓の披露では、三毛別羆事件を表現した曲「羆嵐」を演奏。2人、もしくは3人が互いにぶつからないよう移動しながら、複数の和太鼓を打ち鳴らすなど、見事なバチさばきを見せた生徒たちに、福士町長や吉村さんが称賛の拍手を贈った。

校内選抜発表では、販売実習「苫前市場」について、送迎バスのサイズ変更や取り扱い商品の見直しによる輸送費などの経費削減と、留萌市の港南中学校での学校祭などに出張して実施したミニ販売会により、黒字化を達成したことを報告。会場から感嘆の声が聞かれた。

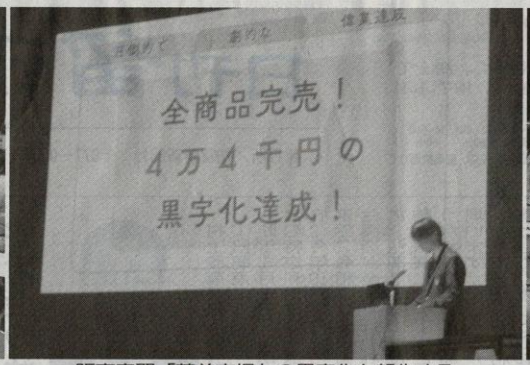
苫前中生徒たちは、アート大作戦や冬季大運動会、第2回フォトコンテストなどと題した地域活性化へのアイデアについて、メロンと力ポチャの種で試作したアート作品を提示したり、実施の目的と内容、効果を説明しながら提案。地域住民と意見を交わし、マチの未来について共に考えるひとときを過ごした。

閉会に当たり、佐藤校長は「生徒たちが地域の方々と学習の成果を語り合う、本当に貴重な機会となった。それぞれの学校でさらに学びを深めてほしい。皆さんの若さが苫前町の未来をつくる。中高生に対し、これからも応援をお願いしたい」とあいさつした。

終了後、高校生開発商品の販売会が開かれ、校内選抜発表で試作経緯などを説明した「とまタコスピザ」などを求める来場者でにぎわった。

（雪田康一郎）

意見交換に先立ちマチおこし案を発表する苫前中学校の生徒



販売実習「苫前市場」の黒字化を報告する苫前商業高校の生徒

郷土芸能豊饒太鼓の披露で「羆嵐」を演奏する苫前商業高校の生徒

世代や国籍を超えて熱戦

苫前でバドミントン大会

【苫前】町バドミントン協会（伊藤通康会長）主催の苫前町民バドミントン大会が、7日午前9時から町スポーツセンターで開かれ、老若男女が世代や国籍を超えてスポーツのひとときを過ごした。

例年、この時期に開かれている大会。今年は、初出場となる小学5年生2人をはじめ、中学生や高校生、一般に加え、母国インドネシアから遠く離れた町内で働く若者も出場。上級者の部、初級者の部1部、同2部それぞれ16人の計48人が出場した。

いずれの部も、1試合ごとにくじ引きでペアを決めながら男女混合のダブルス戦を行い、個人が獲得したポイントで順位をつける方式で優勝を争った。

選手たちは、試合の都度変わるペアと息を合わせ

老若男女が熱戦を展開した苫前町民バドミントン